◇皆の広場

素人の歴史考⑩「播磨の古代史・風土記」　　自文科　永野　徹

［１］はりまの地名由来

H21.4.9

（はりま）　延喜式では、播磨国は山陽道八国大国の一つで十二郡からなる

地名起源　東は摂津、南は瀬戸内海、西は備前・美作、北は丹波・但馬・因幡と接する。
大国主(ｵｵｸﾆﾇｼ)、少名彦(ｽｸﾅﾋｺ)の2神が天下を巡行してこの国の海辺に至りて
「この国は張り弓なす国なり＝張り浜之国」と宣われたのが「はりま」の起源と記す
が他にも次の地名伝承があり、開墾の「墾間」が有力である。

１．針間　古事記に出ている名前
旧事本記では日本の中間にあり針の如し針間、鴨国、明石の3名が出ている
江戸時代の飾磨郡より西を言う

２．晴間　「国名風土記」に神功皇后の制韓のため船出した時に雨が止んで晴れた
つまり雨の晴れ間の国

３．墾間　開墾を意味する墾間（はりま）からの命名では？（播磨の国は十二群也）
武烈天皇(500年頃)御代に物部真鳥命が天皇の勅を奉じて韓国に使いして
その任務を終えて帰路、多遅麻国三島(城崎）の水戸に上陸してから天皇に
使命を複奏したところ、功により「韓国連」の姓を賜り、その子渚鳥は欽明天皇
（540年頃)の御代に城崎郡司となり大いに墾谷を開墾して、その名を「墾磨命
（ﾊﾘﾏﾉﾐｺﾄ）」に改名して墾谷の地名起源となり、飯谷開拓の租神として「韓国
神社」に鎮祭されたとの伝承が城崎にあるが正に開墾の「墾磨命ﾊﾘﾏﾐｺﾄ」の
発生起源である。
播磨の国は古代において、地元神と言える伊和大神をはじめ葦原志許乎命
（ｱｼﾜﾗﾉｼｺｵ=大己貴命)、天日槍命(ｱﾒﾆﾋﾎﾞｺ)、高皇産霊(ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞ）などが
国取り争奪戦を繰り広げたと言われている。
播磨の一の宮は北西の片隅の宍粟郡にあり播磨の歴史はここから始まった
播磨風土記で伊和大神は播磨の開発を終えて疲れ果て死んだ事になっている。
恐らく、伊和一族が出雲一族、天日槍によって征服されたのでは。
播磨の国に伊和大神を信奉する伊和族が棲んでいた。
本拠地は姫路の西方手柄山から夢前川流域に掛けての地域だった
伊和族は主として播磨中央部から西側に勢力を持っていた。
東部は鴨族の勢力が広がっていた。
その伊和族の王国へ出雲からの侵略軍がなだれ込んできた。
出雲の大王大己貴命(ｵｵﾅﾑﾁ=大国主）の率いる大軍であった
彼らは宍粟の鉄を狙って侵入してきた
結果として、伊和族は出雲族に屈服し、支配された。侵略出雲軍は播磨北部
から、但馬南部に渡って勢力を拡張した。
そこへ天日槍の一段が朝鮮から渡って来て播磨に上陸した。
出雲族と天日槍との戦いは互角でわかれて、伊和族との戦いではヒボコが
勝利したようである。
宍粟での戦いでは出雲・伊和・日槍の３者が睨み合いになり延々と戦いが続き
この時仲裁人として高天原から高皇産霊神(ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞ)が現れて三者の和平が
一夜で成立した。この話が三方町の御形(三方=三者)神社縁起に受け継がれる。
この結果葦原志許乎は但馬の神崎郡、養父郡と播磨の宍粟郡を得て、天日槍命
は但馬の出石へ押し込められた事になるが
景行天皇（大和朝廷）は上記の戦いを仲裁して天日槍に
「播磨の国の宍粟郡と淡路島の出浅郡」をヒボコに与えるとのたまうが
なぜかヒボコは辞退して近江から若狭をへて但馬へと入ったという
日槍はヤマトと出雲の強力な二国を相手に止む無く播磨から撤退したのか
葦原志許乎命と天日槍命が生野の山で各々葛篭三條（つづらみかた）を持ち
足につけて投げたところｱｼﾜﾗｼｺ、ｱﾏﾉﾋﾎﾞｺの葛篭はそれぞれ以下に落下して
そこが彼らの支配地となる
（葦原志許乎の葛篭）１條：但馬の気多（城崎)、１條：養父郡、１條：三方
（天日槍命の葛篭）３條ともに但馬の国・出石

［２］播磨風土記の目次とメモ

主として、地名の起源を述べるものがい多い。
「はりま古代史」に取上げた以外の目次は以下のとおり

加古郡　景行天皇が印南別嬢(ｲﾅﾐﾉﾜｹｲﾗﾂﾒ)に加古の松原で会い妃とされた。

印南郡　仲哀天皇が熊襲征伐に出航された時に印南の浦で停泊された。（入浪評=静かな海）
（石の宝殿）
・仲哀天皇の墓石を神宮皇后が讃岐に求めて加古郡池の原に来られた時に

2丈＊1.5丈：1.5丈の家型の大石が有り、由縁は聖徳太子の御代に「物部守屋」が
自分の石棺として創ったものであるとの伝承。

飾磨郡　（英賀の里）伊和大神の子、阿賀比古・阿賀比売の二柱の神が居られた由縁の名称
（伊和の里）伊和の一族がここに来て棲んだと言う。
（私部ｷｻｷﾍﾞ）欽明天皇の時代、弓削部の祖である田田良（渡来人）が金製品を
献上してﾀﾀﾗ姓を拝領。
（夢前町）＝射目前ｲﾇｻｷと云い弓を射る人から来た地名

揖保郡　（栗栖の里）仁徳天皇から若倭部池子が皮を剥いた栗を賜り持帰り植えた地を栗栖
（越部の里）安閑天皇の時、但馬国の三宅から赴任して来た人達の邑を越部村と云う。
（伊勢野）伊和大神の子伊勢部比古命・比売命を祭った処家々が安泰となり伊勢と呼ぶ

讃容郡（ｻﾖのｺﾎﾘ）

宍粟郡（ｼｻﾎのｺﾎﾘ）

神崎郡(ｶﾑｻﾞｷのｺﾎﾘ)
伊和大神の子、建石敷命(ﾀｹｲﾜｼｷﾐﾉﾐｺﾄ)が神前山に居られたので神前郡と言う
（生野）　昔荒神が往来する人の半分を殺した。それで死野と名づけたが応神天皇
が「名前が良くない」と「生野」に改名された。

託賀郡(ﾀｶﾉｺﾎﾘ)
巨人がこの土地は天が高いので屈なくてもよいので「託賀ﾀｶ」と名付く

賀毛郡　応神天皇が鴨を射るために山を越えられた所を「鴨坂(古坂)」と呼び、鴨が落ちた処
を「鴨谷」、鴨を煮たところを「煮坂」と呼ぶ。上鴨里（旧賀茂村）、下鴨（旧下里村）
（吸谷）　修布の里（ｽﾌﾉｻﾄ）で１人の女が水を汲もうとして井戸へ吸い込まれたので
吹谷（条布ｽﾌ)と名称。今もどんな干ばつにも涸れない「ふんじ井戸」がある。
（慈眼寺)吸谷にある慈眼寺（廃寺跡）は比叡山から来た実恵法師が建立したとの
伝承で、その廃寺跡に建立された観音堂そばには白鳳期の大規模寺院の
礎石庭園があり、この地の首長・針間鴨国造によって建てられた寺院跡で
はと言われている。
（女鹿山）西上野にある女鹿山（めがやま）は、風土記によると「鹿咋山（かくいやま)」
とあり、応神天皇がこの地に狩りに来られた時に「自分の舌を食べている
白い鹿に出会われた」ので鹿咋山と言い山頂に前方後円墳群がある。

美襄郡（ﾐﾅｷﾞﾉｺﾎﾘ）
履中天皇が志深里(ｼｼﾞﾐ)の許曾社（ｺｿﾓﾘ)に行幸されて、水が綺麗に流れている
のを見て「みなぎ郡」と名付く。
高朗宮（高宮）がｵｹで仁賢天皇、池朗宮（洞窟屋）が顕宗天皇（ﾖｹ）

［３］伊和氏族と天日槍（播磨一の宮）

（一の宮） 伊和神社
宍粟郡神戸村(ｶﾝﾍﾞ）国幣中社大国主神を祀る播磨国の一の宮(宍粟郡志）
伊和大神、大己貴命(ｵｵﾅﾑﾁ）、天日矛命(ﾋﾎﾞｺ)、高皇産霊神(ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞ)
伊和大神=大国主命(ｽｻﾉｵの子)を同一神に見ている（はりま風土記）
国造り・酒・鉱山の神様

伊和氏族 伊和族は５世紀頃に衰退したか
伊和氏族は市川の下流と姫路の手柄山から西方一体が本拠地
韓国からの天日槍命は揖保川川口から上流の竜野あたりで葦原志許平命
と出合い上陸の許可が得られなかったと風土記に描かれている。
伊和神社周辺にはたたら(鉱山）の跡が多くあり、一つ山古墳をはじめとして
伊和氏族の古墳群があり伊和氏族の本拠地と思われる。

天日槍命 日本書紀では垂仁天皇時代に天日槍が日本へ来た
崇神天皇の時、越後の気比の浜に都怒賀阿羅斯等(ﾂﾇｶﾞｱrｼﾄ)が渡来と
あるが天日槍と同一人物ではとの説もある。
出雲の国の大国主命は葦原志許乎と名乗って天日槍と戦いつぎに
伊和大神と名乗って天日槍と戦った。
〇天日槍命(ｱﾒﾆﾋﾎﾞｺ）と伊和族の戦い
伊和族とヒボコ（天日槍)族との戦いでは姫路手柄山より西側一帯にいた
伊和族と揖保川流域にいたヒボコ族がはじめは市川中流の福崎で衝突した。
その次は舞台は宍粟郡の波賀町へと移るが揖保川上流はヒボコ族が先に
占拠していた
〇天日槍命(ｱﾒﾆﾋﾎﾞｺ）と葦原志許乎（ｱｼﾜﾗﾉｼｺ)の戦い
風土記揖保郡より
①揖保川河口～竜野の戦い
天日槍命は韓国より渡りて、揖保川河口から上流竜野に到ると記載あり。

この時、葦原志許乎に上陸の許可を申請し、上陸を許されなかった。
②山崎～一の宮の戦い
アシワラシコオとアメノヒボコの壮絶な戦いが繰り広げられた事から奪谷
（うばいだに）と呼ばれる地名がある。
③福崎の戦い
神崎郡福崎町糠岡で伊和大神との戦いで天日槍命の大神軍が稲をつき
糠が山となった事から糠岡の地名が誕生した。
④波賀町の戦い(ヒボコ勝利)
宍粟郡波加の村でヒボコと伊和大神が争ったとき、大神が出遅れて「波加らざる
に先に到りしかも」と故に波加の村という。（波加=波賀町）
景行天皇（大和朝廷）は上記の戦いを仲裁して天日槍に
「播磨の国の宍粟郡と淡路島の出浅郡」をヒボコに与えるとのたまうが
なぜかヒボコは辞退して近江から若狭をへて但馬へと入ったという
日槍はヤマトと出雲の強力な二国を相手に止む無く播磨から撤退したとの見方
葦原志許乎命と天日槍命が生野の山で各々葛篭三條（つづらみかた）を持ち
足につけて投げたところｱｼﾜﾗｼｺ、ｱﾏﾉﾋﾎﾞｺの葛篭は以下に落下と記載。
(葦原志許乎の葛篭）１條：但馬の気多、１條：養父郡、１條：三方
(天日槍命の葛篭）３條ともに但馬の国・出石
但馬に入った天日槍は但馬の女麻多鳥（ﾏﾀﾖ）をめとり但馬諸助一日檜杵(ﾋﾅﾗｷﾞ)
一清彦一田道間守(ﾀｼﾞﾏﾓﾘ)一比多詞(ﾋﾀｶ)－葛城高額比女：息長宿禰一神功皇后
清彦の時代に天皇からヒボコの祭祀の宝物を献上してヤマト朝廷に服している。
宝物：羽太玉・足高玉・鵜鹿鹿赤石玉・出石小刀・出石鉾・日鏡・熊神籠
古事記その他天日槍系図からヒボコ族と葛城族と息長族が婚姻関係で連携した

［４］東播・多可（播磨二の宮）物語

（二の宮） 荒田神社
加古川上流野村で支流の杉原川を遡ると加美町西脇で荒田川に到る
祭神は少名彦命、スサノ命、木花咲耶素姫命
鍛冶屋・タタラの神でもある
荒田とは既に田が開かれていたの意か

多可郡 播磨風土記の巨人伝説で昔大きな人がいて背が高くて天に閊える為に
身を屈めて歩いていたがこの国は天が高いので背を伸ばして歩けるので
托賀の都＝托加の都＝多可郡と名称

加美 賀眉(ｶﾐ)の里は大海山・荒田の村で加古川上流杉原川の川上より名称

(荒田神社と天目一命）

天目一命 天之御影神と同一で近江富士の御上神社が天目一命を主神とする
（ｱﾒﾉﾏﾋﾄﾂﾉﾐｺﾄ）
鍛冶屋の神である天目一命と加美町荒田神社の巫女道主日女命とが結ばれた。
鉱山開発により田が荒れて農業が不作となったのでこの地を荒田と呼ぶ。
片目を閉じて包丁のひずみ等を調べる仕草が真正面から見ると目一つに見える
相棒は天津真浦と言う

タタラ一族 百済王子の琳聖太子は播磨の国の丹生山に明要寺を建立して百済聖明王
の第二王子惠の弟。琳聖太子は九州の多々良浜に上陸したので大内氏は
多々良氏と称していた。（タタラ師）
琳聖太子は妙見神を携えて渡来した

妙見神 北極星と北斗七星の神で中国で兵乱・禍災・生死を司る神
この神は北方の獣神で亀と白蛇をいい、玄武とも呼ぶ
仏教が中国に入り北辰神は菩薩となり、北辰菩薩または妙見菩薩となる
妙見菩薩は国土守護・民衆の苦悩除去に効験あるとして信仰された

鍛冶師 鍛冶は金打ち一かねち一かじと呼ばれる
金山彦（鉱山の神）
天目一命（鍛冶の神）
石凝姥（鋳物の神、笛吹きの神）ｲｼｺﾘﾄﾞﾒ

役の行者 本名は鴨の小角といい、舒明天皇と鴨の長者の娘・白専娘(ｼﾗﾀﾗﾒ)の子か
663年～ 生誕地は奈良県御所市茅原
葛城山を採薬園とする採薬師、後に薬師寺の典薬頭になる弟子の
韓国広足に讒言されて伊豆に流される
小角が体得した孔雀明王経は法道仙人の伝授か

［５］賀茂のくに(播磨三ノ宮）

賀茂　風土記によると「賀毛となづくるゆえは、品太天皇（応神天皇）の御世、鴨の村につがいの鴨が栖を作りて卵を生みき。故に賀茂の郡という。
現在の加東郡・小野市・加西市あたりをカモの国という。平安末期に賀毛郡が東西に2分されて加東郡と加西郡となる

賀茂族
カモ族の本拠地は大和の国葛城上郡鴨の地で、カモはカミ（神）を語源とし、事代主命を祀りその祖はｵｵﾀﾀﾞﾈｺ命(大田田根子命）とされている
大田田根子は三輪君が始祖である（日本書紀：崇神天皇段に記載あり）
大神神社由緒には「大田田根子命の孫・大賀茂祇命が勅を受けて社を葛城村賀茂の地に建てて事代主命を奉斎し、賀茂君の氏を賜う
播磨浄土寺の近くには広渡廃寺跡があり、小野市役所近くに王塚古墳がある。（直径45M、高さ8M）このあたりを起勢の里（ｺｾﾉｻﾄ）と呼び巨勢氏の本拠地である

王塚古墳　小野市役所近くに王塚古墳がある。（直径45M、高さ8M）
このあたりを起勢の里（ｺｾﾉｻﾄ）と呼び巨勢氏の本拠地であり
巨勢氏の首長の古墳かもしれない。

播磨浄土寺
俊乗坊長源によって建久８年(1197)に落成した。
浄土堂、薬師堂・開山堂・鐘楼・八幡神社からなる
阿弥陀三尊立像は快慶の作であり特に有名である。
浄土堂は長源が東大寺再建の建築様式として採用した天竺様式の貴重な遺構である。

広渡寺廃寺跡
奈良時代前期（8世紀初頃）に建てられた寺跡で薬師寺式伽藍配置を持っていたようだ．鎌倉時代はじめ東大寺を再建した俊乗坊長源が浄土寺を作った時に広渡寺の薬師像を浄土寺へ移したと伝えられる
名前の通りこのあたりは加古川の広い渡し場であったのかも。

羅漢と古墳の道
現在の加西市北條で播磨の国の東部で古代賀茂の国の一部である
東高室の大歳神社～西福寺～酒見寺～住吉神社～五百羅漢～玉丘古墳～亀山古墳～河内町善光寺～法華山一乗寺

東高室　古代から高室石で知られた石屋の村である
江戸時代から昭和のはじめまで「高室役者」で知られた役者村で文化文政時代が最盛期。近畿一円から中国四国にかけて巡業した「播州歌舞伎」と呼ばれた。

(播磨三ノ宮）「住吉神社」

三重の里　播磨風土記によれば北條町北條を中心とする下里川流域を「三重の里」と呼び近世「三重北条」と称した
昔老婆が筍を掘り、布に包んだところ、立つことが出来ずに足を三重に折り曲げ座り込んでしまった故、三重という。

酒見寺　天平17年（745）行基が酒見寺を建立した
現在の本堂は明治初年のもので寛文2年に再建されたた多宝塔は高さ20M、室町・安土桃山時代の建築様式である
僧行基が酒見明神(住吉神社）を参拝した時「仏法の力を借りて国家を守りたいので寺院を建てて欲しいとの信託があったと縁起

住吉神社　住吉神社は「播磨の三ノ宮」でもと酒見明神と称した
神社由来では三重の里の山酒人が養老元年（717）住吉大神に宿を貸したたところ一夜の内に田植えをしたばかりの稲苗が大きな松の木なってしまったので驚いて松林に神殿を建て神を祀った
一説では神功皇后の命により酒看都子(ｻｶﾞﾐﾂｺ）がここの泉の水を用いて酒造りを始めたとも伝える。
(播磨風土記）「河内の里」より
この里の田は草敷かずとも苗代に種が播けるという。その故は住吉大神が攝津の住吉神社へ向かう途中でこの村で食事をされたこの時、苗代用に積んでいた藁を座敷き藁として使われた為に村人が大神に訴えたところ、以後、汝の田は草敷かずとも苗代ができるようにしてあげようとおっしゃった。
以上の伝承は山酒人（播磨鴨国造）と住吉神信仰との結びつきを物語る

海神である住吉の神が内陸部の田園地帯にまで神威と信仰を広めていた。
例祭は4月初旬で「北条節句祭りで有名」（播州三大祭りの一つ）
この祭には、豪華な屋台の他に「龍王舞(ｼﾞｮﾏｲ)」と「鶏合わせ」の古式

（龍王の舞）

方固めの舞で猿田彦が天孫ニニギノミコトの高天原降臨のとき道案内を務めた所作を模っている。

（鶏合わせ）

宮中で3月3日、清涼殿の南階でおKなわれる闘鶏式の形が神社に伝えられていて、氏子の幸運を祈るもの。

五百羅漢

酒見寺境内の一隅にあり、羅漢の数は424体
「親の顔が見たけりや、北条西の、五百羅漢堂にござれ」の歌がある
石材は役者村で知られた高室産の石（凝灰岩）で顔が異国人のようであり作者は外国人漂流者か、時代は室町頃かいずれもはっきりしていない。

玉丘古墳

この古墳は県下5位の大きさで、全長105Mの前方後円墳、後円部分の直径64M、高さ9Mで周囲に幅20Mの水濠で両側に倍塚がある。
古墳は明治16年に盗掘されて、勾玉、菅玉、刀剣など副葬品は持ち去られて今はなく、古墳時代中期（5世紀前半）の竪穴式古墳である。
石棺は県内最古の組合せ式長持形石棺で、播磨風土記では河内王国仁賢、顕宗天皇（オケ、ヲケ）の伝承に登場する玉丘古墳である。

（根日女命）

オケ（仁賢）・ヲケ（顕宗）2人の王子は播磨の国・美嚢（ﾐﾅｷﾞﾉ)の郡志染の里にいる時山部蓮を遣わせて国造許麻の娘・根日女命に求婚した。
二皇子は譲り合い根日女年老いて逝去してしまった。そこで皇子達は小楯を遣わして墓に装飾品を飾ったのでこの墓を玉丘と名づけその村を玉野と名づけた。
これは、裏を返すと鴨の国の娘とヤマト国皇子との縁談が旨く行かなかった事を示し両者の政治的提携が旨くいかなかった事を意味するのか

（飯盛山）

山や丘陵などの名称として全国各地に「飯盛山」が沢山ありますが
播磨風土記には、「加西市豊倉町の飯盛山(133M)」について賀茂郡の楢原里に「飯盛嵩」と言う山があり、「大汝命(ｵｵﾅﾑﾁﾉﾐｺﾄ)の御飯をこの嵩で盛ったからそう呼ぶ」と記載されている。つまり

①山自体がご飯を「高盛り」したような円錐状の外見が美しい山である。
この周辺に住む人達は神の鎮座する特別な山と感じたようである。

②山と稲作との関係で不可欠な灌漑用水を供給し、飲み水の水源地として、人々はこの山を米作りを司る神の山、豊作を感謝してその実り（御飯）を祭り聖地と仰ぎ神の山として崇敬したものである。その証しに飯盛山の山麓には現在も天満宮と稲荷社が鎮座している。

③飯盛山の名称由来は神の降臨を仰ぎ、収穫に感謝し、新米の「御飯」を盛り神の食事（食膳）とする厳粛な神事があった。
柳田国男によれば「盛る」には「物を高く積み上げ一杯にする」と言う意味と「神を酒食でもてなし、一緒になって歓待する」の意味がある。

（法道仙人と古法華＆一乗寺）

法道仙人

法道仙人はインドの人で法を修めて神通力を持、紫雲に乗り中国に渡り百済を経て日本に飛来し、播磨の国加西郡法華山に天降った
釈迦が法華経を説いた霊鷲山の仙苑に住む持明仙500人の内の1人
所持するものは千手観音・仏舎利・宝鉢のみである
笠松山に降りてはじめ一乗寺に詣り次に古法華寺へ行った
古法華寺　650年法道仙人が開基し、千手観音・仏舎利・宝鉢を安置。
国東半島との繋がりがあるのではと推定される
孝徳天皇の病気治癒を祈る為に宮中に召されて見事に平復。
法道は播磨・摂津・丹波の諸国に百ケ寺を建立した
美嚢（ﾐﾅｷﾞﾉ)郡14ヶ寺、加東・加西23ヶ寺、多可郡12ヶ寺、他明石・加古川・印南・飾磨・揖保・作用等で主な創建時は天智帝の時代
加西では一乗寺・普光寺・奥山寺・周遍寺等

孝徳、斉明、文武天皇の時代で主な創建期は天智天皇のころ
法道伝説の成立は12世紀中期としている。実在も疑わしい。
この時代に雄略天皇の病気治癒のため豊国からカンナギが宮中に
迎えられた。蘇我氏は大和の渡来人漢氏に変えて北九州豊国の秦氏に
支援を求めて587年にも豊国法師を呼んでいる。

古法華寺 650年法道仙人が開基し、千手観音・仏舎利・宝鉢を安置。
九州の国東半島を思わせる善坊山の岩肌
高さ1M、幅72cmの凝灰岩（地元の長石）の表面に中尊・脇時の二尊が
陽石されている。他に三重塔・香呂・獅子・蓮華座などが見える
制作手法に中国の影響が見られるので渡来人の作製ではないかと言
われ日本最古の白鳳時代のの石仏と言われている。

普光寺 加西市川内町にある。法道仙人の開基
651（白雉2）の創建で本堂・鐘楼・仁王門と背景に蓬莱山

法華山一乗寺 西国26番札所
（西国三十三箇所めぐり創設者は大和長谷寺の沙弥徳道僧正で播磨国揖保郡の人）
法華山一乗寺はインド霊鷲山の五百持明仙の随一、法道仙人の開基である。
仙人は一日仙苑を出て、紫雲に乗り中国朝鮮を経て日域に入り法華山に留まり
法華経を読誦し密観を修し千手飛鉢の法を示して有情を教化し仏法弘通を待つ。
大化5年（649)孝徳天皇の病い回復のため、左大臣阿倍倉内の要請で加持祈祷
を行い忽ち平癒された功により、当地に本堂建立の勅あり。
白雉元年(650)落慶法要に孝徳天皇が法華山まで行幸され、「一乗寺」の勅額を
賜る。 花山法皇が永延元年（987)に巡礼されて西国26番札所となり、その時
「春は花、夏は橘、空きは菊、いつも妙なる法の華山」と詠まれた。

諸堂 創建650年、孝徳天皇勅願、法道仙人開基
本堂・護法堂・妙見堂・弁天堂・三重塔・常行堂・奥の院
金堂：創建650年、本尊観世音菩薩（重文：白鳳仏）
三重塔：仁西和尚の勧進により1171年建立(国宝：藤原様式）
護法堂：一間社春日造
妙見堂：三間社流造
弁天堂：一間社春日造、
賽の河原：地蔵菩薩を祀り、水子供養の塔を積む

文化財 ・聖徳太子、天台高僧画像（国宝：平安時代）
・阿弥陀如来五尊画像（重文）
・五大明王画像（重文）
・法道仙人木造（重文）
・僧形座像、五輪塔、地蔵院

［６］三木志染

オケ(仁賢天皇）、ヲケ（顕宗天皇）
オケ、ヲケの父は履中天皇の皇子・市辺押磐皇子が近江の蒲生郡日野町
で狩猟中に従兄弟大泊瀬皇子（雄略天皇）に殺された。この時日下部連
意美は子の吾田彦と共に2皇子を連れて三木市志染の窟屋ｲﾜﾔへ逃れた。
二人の皇子は志染村の伊等尾(ｲﾄﾐ)の家に預けられた。。
長らく経ってから、伊等美の家の新築祝いの時に祝詩で素性を証して
播磨の国に遣わされていた山部蓮小楯がこれを聞き皇子の母、手白髪命
に報告する。この時雄略天皇は亡くなりその子である清寧天皇には子供
がなく弟のﾖｹが顕宗天皇となり、継いで兄のオケが仁賢天皇都成る。
三木市窟屋は「窟屋の金水」として有名で天然記念物の「光り藻」の花が
咲く頃に溜まり水が金色に輝き金水と呼ばれる
（窟屋ｲﾜﾔ：高さ2.7M、幅14M、奥行き7M）
押部谷町には顕宗･仁賢神社がある。

亀山古墳 5世紀前半で玉丘古墳より少し以前のもの。
この付近一帯が国造り時代の針間の国・賀茂の国と言われる場所で
風土記によると「賀毛となづくるゆえは、品太天皇（応神天皇）の御世、鴨の村
つがいの鴨栖を作りて卵を生みき。故に賀茂の郡という。
現在の加東郡・小野市・加西市あたりをカモの国という。平安末期に賀毛郡が
東西に2分されて加東郡と加西郡となる
亀山の山頂からはこの鴨の国が一望に望める国見の丘であろう。

丹生氏族（丹生伝説）
丹生氏族とその女神（丹生都比女命＝稚日女尊＝天照大神の妹）
丹生山は播磨と攝津の国境に跨っており播磨の国風土記の神功皇后

と丹土にかかわる丹生都売女命の伝説がある
はりま風土記では明石郡が欠落しており播磨国の爾保都売女命の記載で
神功皇后が新羅征伐にあたり丹生都比女命から霊力のある赤土を貰った
神功皇后が新羅征伐に出る時にｲｻﾞﾅｷﾞ・ｲｻﾞﾅﾐの子である爾保都売女命
国造石坂比女命を祀れば新羅の国を丹(ｱｶ)いろの浪で平伏できると託宣
あって、ここに赤土を出し給う。その赤土で鉾・軍船・軍衣を染めて海水を
攪拌して赤く濁らせたところ軍船の航路を妨げるものは無く新羅を平伏できた
赤土とは酸化鉄と水銀を含んだ辰砂（水銀化合物）であり、管掌者である丹生
氏族は水銀鉱業の専門家で丹生都比女命を女神として祀っていた
丹生都比女命は辰砂の生産を司る水銀姫（守護神）で水の神でもある。
丹生氏族の発祥地は北九州・筑前伊都で豊後から四国・淡路を越えて
紀伊の国へ広がった。水銀(朱砂)は中央構造線に沿ってのみ産出する。
この線に沿って丹生神社がある。摂津の国山田町は丹生山田・丹生山
丹生山の丹土は水銀は少なく神出平野の雄岡・雌岡の方が多い

童男行者(百済皇子の恵と言われる)

丹生山明要寺の開基伝説として百済皇子の童男行者の渡来説がある
欽明天皇の3年に百済国の聖明王の太子・童男行者が明石に来日し
丹生山に白髪の独鈷を持つ翁の言で伽藍を設置する。（独鈷の桜伝承）
三木志染廃高男寺縁起では法道仙人が明要寺を開基したと記す。
丹生山明要寺は三木市志染町戸田にある。

丹生山　三木市志染町戸田

明要寺　法道仙人か童男行者が開基した
各所に堂塔・伽藍を設けた。また奥の院には梵天帝釈を祀る

七種山

七種神社　聖徳太子の願を受け、太子の師･慧慈法師の弟子・惠灌法師が625年

七草山　来朝氏子の地に旧滋岡寺を建立した。七堂伽藍、本尊は十一面観音

金剛城寺　633年に法道上人の道師として開眼供養。滋岡は七種山の古名
滝川の上流滋岡山に仙仁が住んでいたその修行僧を「滋岡川人」
此村が七年間旱魃が続いた時、川人は七種の穀物種を村人に与えて
村を救った。。高麗僧・慧灌法師が入山した時十一面観音の安置を
命じられた。川人は(ｶﾜﾝﾄﾞ、ｶﾜﾄ)と呼び仙人と書かないのは水神の
要素が強いか
現在は本堂、仁王門、客殿、護摩堂、本坊、庫裏、大師堂からなる
明示7年に現在の地に移って来た。

応聖寺　夢前町前之庄、応聖寺は沙羅の樹の寺で有名
1265年に祐運大徳が開基した。聖観世音菩薩は赤松則祐が祀ったもの

［７］播磨風土記の飾磨郡）

姫路のしらくに（播磨四ノ宮）

白国神社

新羅国の村は牧野の里(姫路市平野町、広嶺山の南山麓)と呼び
昔、朝鮮の新羅の国の牛頭天皇がここに行幸されたので白国と呼び
神社を祭った。
祭神は神阿田津姫命（木花咲耶姫）、相殿、稲背入彦命を祀る。
お産のの神様として、神官を白国氏が務めた。

隋願寺　増位山隋願寺は聖徳太子がインドの阿育王の霊地に因んで伽藍を建て
薬師如来を安置して高麗僧・惠便を住寺させたのがはじまり。
隋願寺は増井寺と呼びもとは出井村に行基が再興したもの

広峰神社　姫路市白国の白国神社
神阿多津姫神・稲背入彦命を祀るが新羅の人達の氏神を祭ったもの
姫路の広峰神社は京都八坂神社の本宮であると神社縁起にある
鎌倉時代に広峰の神官は幕府の御家人となって神領荘園の下司
公文・惣追捕使・地頭などをつとめ地方において勢力を有した。
特に鎌倉時代から南北朝時代に渡って活躍が目立つ。
祀神はスサノオ、稲田姫、八王子である
縁起では祀神は武人神で古来新羅国明神・白国明神・牛頭大王
はじめに神功皇后三韓征伐の時に白幣山にスサノオを祀り後に
吉備真備が託宣を受け祀る。貞観11年に京都八坂神社に分霊
牛頭大王はインド祇園精舎の守護神で除疫神として京都祇園社に祀る
牛頭大王は海を渡ってまず明石の浦に上陸し海に向かって鎮座した。

書写山　円教示は康保3年（966）性空上人が開基
円教寺　三つの寺と呼ばれる大講堂・食堂・常行堂の他護法堂・金剛堂・鐘楼・
寿量院等の建造物と釈迦如来・両脇侍像・四天王像等の彫刻
境内には、姫路城主の本多・榊原・松平の廟所がある。
本多忠政の子・忠刻が千姫を娶り忠刻が1626年に死亡し家来宮本三木
之助が殉死、部下の宮田角兵衛が殉死と続いた
雪彦山　日本の三彦山
①英彦山：福岡と大分の県境にある山で天忍骨命(ｱﾒﾉｵｼﾎﾈﾉﾐｺﾄ)を祀る
②弥彦山：新潟県西蒲原郡弥彦村、山頂に弥彦神社があり、雨乞いの山
③雪彦山：兵庫県飾磨郡夢前川の源流にあり賀野神社御神体が雪彦山
いずれも修験者の山・行者山である。
賀野神社　雪彦山登山口にある神社。播磨鏡によると雪彦山金剛寺という寺院あり
（かや神社　推古天皇の時代に法道仙人が開基した寺で本尊は十一面観世音・不動
明王・毘沙門である。鎮守は三所権現（現在の賀野神社）室町時代に
老婆がこの山で白蛇に出会いお告げで白山宮を勧請した（白山三所権現）
で蔡神はイザナギ・菊理媛・大己貴命。
中尊は弥勒・釈迦・薬師・観音・普賢・文殊　法華堂の本尊は普賢菩薩
塔の本尊は大日如来、護摩堂の本尊は不動尊、こもり堂の本尊は虚空堂
幸彦山の西には安富町の名勝（鹿ヶ壺）がある。鹿ヶ壺近くに千年家と
呼ばれる吉井家の古い建物がありここには伝説の亀石がある。
宍粟郡一の宮にある鶴石の相手の亀石である。
鉢屋一族　漂泊の民といわれた鉢屋一族は天香久山命と物部氏の一族を率いた軍神
天香久山命子孫の一族が鉢屋衆となった。はじめはイボロ（飯母呂）と呼れ
平将門の乱後、八瀬に逃れて一部は出雲八屋となった。仕事は弓削師
笛師・箒師(ﾅﾃﾞｼ)・簷師(ｻｻﾗ)・竿師・研師・鏡師・網師・呪師等広範囲
戦時には諜報・偵察・襲撃といった兵司集団ともなる部族であった
八瀬のイボロは辻強盗で生活していたが空也上人に諭されて四条・五条
の川原に苫屋を建て仮住まいを許されたので苫屋鉢屋とも呼れる
出雲鉢屋は笛師・鉱山師でもあり戦場の合図笛である虎落笛(ﾓｶﾞﾘﾌｴ)
播州の鉢屋の笛師もこの流れである。
(石凝姥命ｲｼｺﾘﾄﾞﾒ)
笛師の遠祖は天香具山命で別命を石凝姥命(ｲｼｺﾘﾄﾞﾒ)、高倉下命(ﾀｶｸﾗｼﾞ)
と言う。天照大神が天岩屋戸に隠れた時、天香久山の鉱物で八咫鏡を造り
山の竹で笛を造り笛を吹き鳴らして大神の心を慰めた鏡師、笛師の技術神

飾磨郡

火明命(ﾎﾉｱｶﾗｲﾉﾐｺﾄ)
播磨風土記では、火明命はオオナムチの子とされ、乱暴ものだったので
ある時、父神は因達神山(ｲﾀﾞﾃﾉｶﾐﾔﾏ)に置き去りにして船で出帆した所
命は怒り船を難破させてしまったので、この土地を波丘と名づけた。
この時飛散した道具とか動物名を以下のように地名に採用した
事・箱・櫛笥・箕・甕・稲・胄・錨・網・鹿・犬・蚕
尾張氏の火明命と別系の神とも言われるが、飾磨郡には尾張系の
一族である石作蓮(ｲｼﾂﾞｸﾘﾑﾗｼﾞ)が居住し、但馬には同族の但馬海直
(ﾀｼﾞﾏｱﾏﾉｱｶﾞﾀ)が、尾治蓮長日子(ｵﾜﾘﾉﾑﾗｼﾞﾅｶﾞﾋｺ)の墓と伝えるものが
ある。さらに、揖保郡には同族の五百木部蓮や石棺制作にあずかる
石作首(ｵﾋﾞﾄ)が住んでいたことから、日明命(別名：天照御魂神）は海を
渡る太陽神であり、太陽神と墳墓との結びつきで南方の太陽船の信仰
との繋がり想起させられる。

（参　考）
上記「はりま風土記」に出て来ない播磨の古刹寺「刀田山−鶴林寺」

鶴林寺　（所在地）兵庫県加古川市加古川町北在家424
（創　建）　589年（崇峻天皇2年）と言われる
（開　基）　聖徳太子の創立となっている
（寺　名）　刀田山（とたさん）鶴林寺(俗称：はりまの法隆寺）
（宗　派）　天台宗（奈良時代は法隆寺に属し、平安時代に天台宗となる）
（本　尊）　薬師如来、愛太子観世音菩薩（重要文化財）
（文化財）本堂・太子堂（国宝）
常行堂、絹本着色聖徳太子像、金銅聖観音立像（重要文化財）
（縁　起）　高句麗の僧、恵便法師が物部氏等の排仏派の迫害を逃れて加古川
に身を隠されていた時、聖徳太子が教えを受ける為に当地に来所さ

れた。後に秦河勝に命じて精舎を建立し「刀田山四天王寺聖霊院」
と命名されたのが当寺の始まり。
718年（養老2年)に身人部(ﾑﾄﾍﾞ)春則が太子の遺徳を顕彰して七堂
伽藍を建立し、9世紀はじめに慈覚大師円仁が入唐前に立寄り国家
安泰を祈願して薬師如来を奉納され、以降天台宗となった。
1112年(天永2年）鳥羽天皇から勅額を頂いて「鶴林寺」と改名。
山号は聖徳太子がこの地で、百済の僧・日羅（にちら）と会いその
帰国を遮って刀を立てた事から刀田山と言うと伝えている
鶴林寺の寺号もインド、中国、韓国にもあり由縁がある
金銅製観音は像高83cmの銅造りですらりとした立像で白鳳仏の
傑作である。あるとき泥棒がこの観音像を盗んで溶かそうとした
ところ、「アイタタ」と言う観音様の声に驚き像を返して改心したとの
伝承がある。

［８］播磨の氏族

伊和氏族

市川の下流と姫路の手柄山から西方一体が本拠地
播磨古代豪族のひとりで母栖を本拠地とする。
母栖は平の敦盛の母が隠遁生活していた平家落人伝説あり。
母栖の氏神は松尾大明神で、鉱山師の村で東は雪彦山、西は日名倉山へと
修験者、鉱山師の道で繋がっていたのでは南北は南に　北は因幡街道
一つ山古墳群があり伊和氏の居住地跡と推定される

天目一命
（ｱﾒﾉﾏﾋﾄﾂﾉﾐｺﾄ）
天之御影神と同一で近江富士の御上神社が天目一命を主神とする
鍛冶屋の神である天目一命と加美町荒田神社の巫女道主日女命とが結ばれた。
鉱山開発により田が荒れて農業が不作となったのでこの地を荒田と呼ぶ。
片目を閉じて包丁のひずみ等を調べる仕草が真正面から見ると目一つに見える
相棒は天津真浦と言う

タタラ一族
百済王子の琳聖太子は播磨の国の丹生山に明要寺を建立して百済聖明王
の第二王子惠の弟。琳聖太子は九州の多々良浜に上陸したので大内氏は
多々良氏と称していた。（タタラ師）
琳聖太子は妙見神を携えて渡来した

妙見神
北極星と北斗七星の神で中国で兵乱・禍災・生死を司る神
この神は北方の獣神で亀と白蛇をいい、玄武と呼ぶ
仏教が中国に入り北辰神は菩薩となり、北辰菩薩または妙見菩薩となる
妙見菩薩は国土守護・民衆の苦悩除去に効験あるとして信仰された

鍛冶師
鍛冶は金打ち一かねち一かじと呼ばれる
金山彦（鉱山の神）
天目一命（鍛冶の神）
石凝姥（鋳物の神、笛吹きの神）ｲｼｺﾘﾄﾞﾒ

役の行者
663年～
本名は鴨の小角といい、舒明天皇と鴨の長者の娘・白専娘(ｼﾗﾀﾗﾒ)の子か
生誕地は奈良県御所市茅原
葛城山を採薬園とする採薬師、後に薬師寺の典薬頭になる弟子の
韓国広足に讒言されて伊豆に流される
小角が体得した孔雀明王経は法道仙人の伝授か

賀茂族

カモ族の本拠地は大和の国葛城上郡鴨の地で、カモはカミ（神）を語源とし、
事代主命を祀りその祖はｵｵﾀﾀﾞﾈｺ命(大田田根子命）とされている
大田田根子は三輪君が始祖である（日本書紀：崇神天皇段に記載あり）
大神神社由緒には「大田田根子命の孫・大賀茂祇命が勅を受けて社を
葛城村賀茂の地に建てて事代主命を奉斎し、賀茂君の氏を賜う

巨勢氏族

播磨浄土寺の近くには広渡廃寺跡があり、小野市役所近くに王塚古墳が
ある。（直径45M、高さ8M）このあたりを起勢の里（ｺｾﾉｻﾄ）と呼び巨勢氏
の本拠地である

王塚古墳

小野市役所近くに王塚古墳がある。（直径45M、高さ8M）
このあたりを起勢の里（ｺｾﾉｻﾄ）と呼び巨勢氏の本拠地であり
巨勢氏の首長の古墳かもしれない。

根日女
オケ（仁賢）・ヲケ（顕宗）2人の王子は播磨の国・美嚢（ﾐﾅｷﾞﾉ)の郡志染
の里にいる時山部蓮を遣わせて国造許麻の娘・根日女命に求婚した。

二皇子は譲り合い根日女年老いて逝去してしまった。そこで皇子達は
小楯を遣わして墓に装飾品を飾ったのでこの墓を玉丘と名づけその村
を玉野と名づけた。
これは、裏を返すと鴨の国の娘とヤマト国皇子との縁談が旨く行かなか
った事を示し両者の政治的提携が旨くいかなかった事を意味するのか

オケ(仁賢天皇)
ヲケ(顕宗天皇)

オケ、ヲケの父は履中天皇の皇子・市辺押磐皇子で近江の蒲生郡日野町
で狩猟中に従兄弟大泊瀬皇子(雄略天皇)に殺された。この時日下部連
意美は子の吾田彦と共に2皇子を連れて三木市志染の窟屋へ逃れた。
二人の皇子は志染村の伊等尾(ｲﾄﾐ)の家に預けられた。。
長らく経ってから、伊等美の家の新築祝いの時に祝詩で素性を証して
播磨の国に遣わされていた山部蓮小楯がこれを聞き皇子の母、手白髪命
に報告する。この時雄略天皇は亡くなりその子である清寧天皇には子供
がなく弟のヲケが顕宗天皇となり、継いで兄のオケが仁賢天皇都成る。
三木市窟屋は「窟屋の金水」として有名で天然記念物の「光り藻」の花が
咲く頃に溜まり水が金色に輝き金水と呼ばれる
(窟屋:高さ2.7M、幅14M、奥行き7M)
押部谷町には顕宗･仁賢神社がある。

法道仙人

法道仙人はインドの人で法を修めて神通力を持、紫雲に乗り中国に渡り
百済を経て日本に飛来し、播磨の国加西郡法華山に天降った
釈迦が法華経を説いた霊鷲山の仙苑に住む持明仙500人の内の1人
所持するものは千手観音・仏舎利・宝鉢のみである
笠松山に降りてはじめ一乗寺に詣り次に古法華寺へ行った
国東半島との繋がりがあるのでは
孝徳天皇の病気治癒を祈る為に宮中に召されて見事に平復。
法道は播磨・摂津・丹波の諸国に百ヶ寺を建立した
美嚢(ﾐﾅｷﾞﾉ)郡14ヶ寺、加東・加西23ヶ寺、多可郡12ヶ寺、他明石・加古川・
印南・飾磨・揖保・作用等で主な創建時は天智帝の時代
加西では一乗寺・普光寺・奥山寺・周遍寺等
孝徳、斉明、文武天皇の時代で主な創建期は天智天皇のころ
法道伝説の成立は12世紀中期としている。実在も疑わしい。
この時代に雄略天皇の病気治癒のため豊国からカンナギが宮中に
迎えられた。蘇我氏は大和の渡来人漢氏に変えて北九州豊国の秦氏に
支援を求めて587年にも豊国法師を読んでいる。

柳田国男 柳田国男の生家は福崎町辻川の旧街道沿いにあったが現地へ移転された
明示8年松岡家六男として生まれた。27歳で大審院判事・柳田良平の養子

火明命(ﾎﾉｱｶﾗｲﾉﾐｺﾄ)

播磨風土記では、火明命はオオナムチの子とされ、乱暴ものだったので
ある時、父神は因達神山(ｲﾀﾞﾃﾉｶﾐﾔﾏ)に置き去りにして船で出帆した所
命は怒り船を難破させてしまったので、この土地を波丘と名づけた。
この時飛散した道具とか動物名を以下のように地名に採用した
事・箱・櫛笥・箕・甕・稲・冑・錨・網・鹿・犬・蚕
尾張氏の火明命と別系の神とも言われるが、飾磨郡には尾張系の
一族である石作蓮(ｲｼﾂﾞｸﾘﾑﾗｼﾞ)が居住し、但馬には同族の但馬海直
(ﾀｼﾞﾏｱﾏﾉｱｶﾞﾀ)が、尾治蓮長日子(ｵﾜﾘﾉﾑﾗｼﾞﾅｶﾞﾋｺ)の墓と伝えるものが
ある。さらに、揖保郡には同族の五百木部蓮や石棺制作にあずかる
石作首(ｵﾋﾞﾄ)が住んでいたことから、日明命(別名:天照御魂神)は海を
渡る太陽神であり、太陽神と墳墓との結びつきで南方の太陽船の信仰
との繋がり想起させられる。

[9] 播磨の神社

播磨の神社

(一の宮) 宍粟の伊和神社
蔡神
宍粟郡神戸村(ｶﾝﾍﾞ)国幣中社大国主神を祀る播磨国の一の宮(宍粟郡志)
伊和大神、大己貴命(ｵｵﾅﾑﾁ)、天日矛命(ﾋﾎﾞｺ)、高皇産霊神(ﾀｶﾐﾑｽﾋﾞ)
伊和大神=大国主命(ｽｻﾉｵの子)を同一神に見ている(はりま風土記)
国造り・酒・鉱山の神様

（二の宮） 多可の荒田神社
加古川上流野村で支流の杉原川を遡ると加美町西脇で荒田川に到る
祭神は少名彦命、スサノ命、木花咲耶素姫命
鍛冶屋・タタラの神でもある
荒田とは既に田が開かれていたの意か
（三の宮） 加西市北条町の住吉神社（酒見明神）
代々針間鴨国造をつとめた山氏がその祖先神を祀ったもの
（四の宮） 姫路市白国の白国神社
神阿多津姫神・稲背入彦命を祀るが新羅の人達の氏神を祭ったもの
（五の宮） 姫路市・広峰山の広峰神社
御形神社 宝亀３年(772年)建立
宍粟郡三方村にあり、式内神社でスサノオ命を奉祀しアメノヒボコを配祀る
中殿には葦原志許乎命
右相殿には月読神、天日槍命
左相殿には高皇産霊神、須佐之男神
鶴石伝承：
一夜のうちに杉、檜が生え茂り空に待っている沢山の鶴のうち二羽が舞い
降りて石に上に北向きに眠っていたので神社が北向きに、あるいは出雲を
向いて立てられた。
松尾明神 母栖の松尾明神は宝暦１２年以降に勧請されたものか
五霊神社
播磨浄土寺
俊乗坊長源によって建久８年(1197)に落成した。
浄土堂、薬師堂・開山堂・鐘楼・八幡神社からなる
阿弥陀三尊立像は快慶の作であり特に有名である。
浄土堂は長源が東大寺再建の建築様式として採用した天竺様式の
貴重な遺構である。
王塚古墳 小野市役所近くに王塚古墳がある。（直径４５M、高さ8M）
このあたりを起勢の里（ｺｾﾉｻﾄ）と呼び巨勢氏の本拠地であり
巨勢氏の首長の古墳かもしれない。
広渡寺廃寺跡
奈良時代前期（８世紀初頃）に建てられた寺跡で薬師寺式伽藍配置
を持っていたようだ．鎌倉時代はじめ東大寺を再建した俊乗坊長源が
浄土寺を作った時に広渡寺の薬師像を浄土寺へ移したと伝えられる
名前の通りこのあたりは加古川の広い渡し場であったのかも。
（播州）
大歳神社 狛犬、手水鉢、灯蝋のほかに高室役者の奉納も多かった
西福寺 墓地に役者の供養等があり、大和屋座中の建てた菩提塔と一緒に
追善塔が建っている
酒見寺 天平１７年（７４５）行基が酒見寺を建立した
現在の本堂は明治初年のもので寛文２年に再建されたた多宝塔は
高さ２０M、室町・安土桃山時代の建築様式である
僧行基が酒見明神(住吉神社）を参拝した時「仏法の力を借りて
国家を守りたいので寺院を建てて欲しいとの信託があったと縁起

（播磨三ノ宮）
住吉神社 住吉神社は「播磨の三ノ宮」でもと酒見明神と称した
播磨風土記によれば北條町北條を中心とする下里川流域を三重の里
と呼び近世「三重北条」と称した
神社由来では三重の里の山酒人が養老元年（７１７）住吉大神に宿を
貸したたところ一夜の内に田植えをしたばかりの稲苗が大きな松の木
なってしまったので驚いて松林に神殿を建て神を祀った
一説では神功皇后の命により酒看都子(ｻｶﾞﾐﾂｺ）がここの泉の水を用
いて酒造りを始めたとも伝える。
(播磨風土記）「河内の里」より
この里の田は草敷かずとも苗代に種が播けるという。その故は
住吉大神が攝津の住吉神社へ向かう途中でこの村で食事をされた
この時、苗代用に積んでいた藁を座敷き藁として使われた為に村人
が大神に訴えたところ、以後、汝の田は草敷かずとも苗代ができる
ようにしてあげようとおっしゃった。
以上の伝承は山酒人（播磨鴨国造）と住吉神信仰との結びつきを物語っている

海神である住吉の神が内陸部の田園地帯にまで神威と信仰を広めていた。
例祭は4月初旬で「北条節句祭りで有名」（播州三大祭りの一つ）
この祭には、豪華な屋台の他に「龍王舞(ｼﾞｮﾏｲ)」と「鶏合わせ」の古式がある
（龍王の舞）
方固めの舞で猿田彦が天孫ニニギノミコトの高天原降臨のとき道案内
を務めた所作を模っている。
（鶏合わせ）
宮中で3月3日、清涼殿の南階でおKなわれる闘鶏式の形が神社に伝え
られていて、氏子の幸運を祈るもの。

五百羅漢

酒見寺境内の一隅にあり、羅漢の数は424体
「親の顔が見たけりや、北条西の、五百羅漢堂にござれ」の歌がある
石材は役者村で知られた高室産の石（凝灰岩）で顔が異国人のよう
であり作者は外国人漂流者か、時代は室町頃かいずれもはっきり
していない。

玉丘古墳

全長105Mの前方後円墳、後円部の径64M、高さ9M、周囲に
幅20Mの水濠、両側に倍塚あり。
古墳は明治16年に盗掘されて、勾玉、菅玉、刀剣など副葬品も
持ち去られた。
古墳時代中期（5世紀前半）の竪穴式古墳である
石棺は県内最古の組合せ式長持形石棺
はりま風土記には、河内王国の仁賢、顕宗天皇（オケ、ヲケ）の伝承
にも玉丘古墳が登場する。

鴨国魂神社

玉丘古墳近くの亀山の山腹にある
この近くで丹土・真砂＝水銀が取れる。水銀鉱のある山には山伏や真言の僧
が良く集まっている。

山伏峠石仏(1345年頃の制作か？)

玉野町の亀山に続く山伏峠にある石仏・石英粗面岩製で高さ2．2M幅1.2M
暑さ40CMの家型石棺の蓋石で蓮華座上に定印の阿弥陀坐像を陽刻している
もう一基は高さ2.1M、幅1.05M、暑さ18cmで長持形石棺の蓋に阿弥陀坐像で
左右に化物の小像を配置している
石棺仏は加古川流域の加西・高砂・加古川周に多い。

古法華寺 650年法道仙人が開基し、千手観音・仏舎利・宝鉢を安置。
九州の国東半島を思わせる善坊山の岩肌
高さ1M、幅72cmの凝灰岩（地元の長石）の表面に中尊・脇時の二尊が陽石
されている他に三重塔・香呂・獅子・蓮華座などが見える
制作手法に中国の影響が見られるので渡来人の作製ではないかと言われ
日本最古の白鳳時代のの石仏と言われている。

普光寺 651（白雉2）の創建で本堂・鐘楼・仁王門と背景に蓬莱山
加西市川内町にある。法道仙人の開基

法華山 西国26番札所

一乗寺 本堂・護法堂・妙見堂・弁天堂・三重塔・常行堂・奥の院
大和の長谷寺の開創者である沙弥徳道は播磨国揖保郡の人

丹生山 三木市志染町戸田

明要寺 法道仙人か童男行者が開基した
各所に堂塔・伽藍を設けた。また奥の院には梵天帝釈を祀る

神積寺 妙徳山神積寺は福崎町東田原にある
992年、慶芳上人が開基、創建当時52ヶ寺を有し播磨六山の一つ
山道の両側には妙徳山古墳があり、古墳時代後期(7世紀)の円墳
後堀川天皇の皇后・安喜門院がここに滞在されここでなくなられた

七種神社 聖徳太子の願を受け、太子の師･慧慈法師の弟子・惠灌法師が625年

七草山 来朝氏子の地に旧滋岡寺を建立した。七堂伽藍、本尊は十一面観音

金剛城寺 633年に法道上人の道師として開眼供養。滋岡は七種山の古名
滝川の上流滋岡山に仙仁が住んでいたその修行僧を「滋岡川人」
此村が七年間旱魃が続いた時、川人は七種の穀物種を村人に与えて
村を救った。。高麗僧・慧灌法師が入山した時十一面観音の安置を
命じられた。川人は(ｶﾜﾝﾄﾞ、ｶﾜﾄ)と呼び仙人と書かないのは水神の
要素が強いか
現在は本堂、仁王門、客殿、護摩堂、本坊、庫裏、大師堂からなる
明示7年に現在の地に移って来た。

応聖寺　夢前町前之庄、応聖寺は沙羅の樹の寺で有名
1265年に祐運大徳が開基した。聖観世音菩薩は赤松則祐が祀ったもの

（飾磨郡）

（播磨四ノ宮）

白国神社

新羅国の村は牧野の里(姫路市平野町、広嶺山の南山麓）と呼び
昔、朝鮮の新羅の国の牛頭天皇がここに行幸されたので白国と呼び
神社を祭った。
祭神は神阿田津姫命（木花咲耶姫）、相殿、稲背入彦命を祀る。
お産のの神様として、神官を白国氏が務めた。

隋願寺　増位山隋願寺は聖徳太子がインドの阿育王の霊地に因んで伽藍を建て
薬師如来を安置して高麗僧・惠便を住寺させたのがはじまり。
隋願寺は増井寺と呼びもとは出井村に行基が再興したもの

広峰神社　姫路の広峰神社は京都八坂神社の本宮であると神社縁起にある
鎌倉時代に広峰の神官は幕府の御家人となって神領荘園の下司
公文・惣追捕使・地頭などをつとめ地方において勢力を有した。
特に鎌倉時代から南北朝時代に渡って活躍が目立つ。
祀神はスサノオ、稲田姫、八王子である
縁起では祀神は武人神で古来新羅国明神・白国明神・牛頭大王
はじめに神功皇后三韓征伐の時に白幣山にスサノオを祀り後に
吉備真備が託宣を受け祀る。貞観11年に京都八坂神社に分霊
牛頭大王はインド祇園精舎の守護神で除疫神として京都祇園社に祀る
牛頭大王は海を渡ってまず明石の浦に上陸し海に向かって鎮座した。

書写山　円教示は康保3年（966）性空上人が開基

円教寺　三つの寺と呼ばれる大講堂・食堂・常行堂の他護法堂・金剛堂・鐘楼・寿量院等
の建造物と釈迦如来・両脇侍像・四天王像等の彫刻
境内には、姫路城主の本多・榊原・松平の廟所がある。
本多忠政の子・忠刻が千姫を娶り忠刻が1626年に死亡し家来宮本三木之助
が殉死、部下の宮田角兵衛が殉死と続いた

雪彦山　日本の三彦山
①英彦山：福岡と大分の県境にある山で天忍骨命(ｱﾒﾉｵｼﾎﾈﾉﾐｺﾄ)を祀る
②弥彦山：新潟県西蒲原郡弥彦村、山頂に弥彦神社があり、雨乞いの山
③雪彦山：兵庫県飾磨郡夢前川の源流にあり賀野神社御神体が雪彦山
いずれも修験者の山・行者山である。

賀野神社　雪彦山登山口にある神社。播磨鏡によると雪彦山金剛寺という寺院あり
推古天皇の時代に法道仙人が開基した寺で本尊は十一面観世音・不動
明王・毘沙門である。鎮守は三所権現（現在の賀野神社）室町時代に
老婆がこの山で白蛇に出会いお告げで白山宮を勧請した（白山三所権現）
で蔡神はイザナギ・菊理媛・大己貴命。
中尊は弥勒・釈迦・薬師・観音・普賢・文殊　法華堂の本尊は普賢菩薩
塔の本尊は大日如来、護摩堂の本尊は不動尊、こもり堂の本尊は虚空堂
幸彦山の西には安富町の名勝（鹿ヶ壺）がある。鹿ヶ壺近くに千年家と
呼ばれる吉井家の古い建物がありここには伝説の亀石がある。
宍粟郡一の宮にある鶴石の相手の亀井氏である。

鶴林寺
（所在地）　兵庫県加古川市加古川町北在家424
（創　建）　589年（崇峻天皇2年）と言われる
（開　基）　聖徳太子の創立となっている
（寺　名）　刀田山（とたさん）鶴林寺(俗称：はりまの法隆寺）
（宗　派）　天台宗（奈良時代は法隆寺に属し、平安時代に天台宗となる）
（本　尊）　薬師如来、愛太子観世音菩薩（重要文化財）
（文化財）　本堂・太子堂（国宝）
常行堂、絹本着色聖徳太子像、金銅聖観音立像（重要文化財）
（縁　起）　高句麗の僧、惠便法師が物部氏等の排仏派の迫害を逃れて加古川
に身を隠されていた時、聖徳太子が教えを受ける為に当地に来所さ
れた。後に秦河勝に命じて精舎を建立し「刀田山四天王寺聖霊院」
と命名されたのが当寺の始まり。
718年（養老2年)に身人部(ﾑﾄﾍﾞ)春則が太子の遺徳を顕彰して七堂
伽藍を建立し、9世紀はじめに慈覚大師円仁が入唐前に立寄り国家
安泰を祈願して薬師如来を奉納され、以降天台宗となった。

1112年(天永2年)鳥羽天皇から勅額を頂いて「鶴林寺」と改名。
山号は聖徳太子がこの地で、百済の僧・日羅(にちら)と会いその
帰国を遮って刀を立てた事から刀田山と言うと伝えている
鶴林寺の寺号もインド、中国、韓国にもあり由縁がある
金銅製観音は像高83cmの銅造りですらりとした立像で白鳳仏の
傑作である。あるとき泥棒がこの観音像を盗んで溶かそうとした
ところ、「アイタタ」と言う観音様の声に驚き像を返して改心したとの
伝承がある。